



移..移り住むということ

上田岳弘

移
..
移り住む
ということ

上田
岳弘

移…移り住むということ

SIDE A

うちの高校の人たちは、誰も地元のことを見ていなかった。

県内では指折りの進学校に通い始めた時は、お父さんもお母さんもお祖母ちゃんもみんな誇らしそうで、何年も前に他界したお祖父ちゃんのお墓までわざわざみんなで報告にいったんだった。

「夏美ちゃんは、ほんとうにあんたに似て賢い子だからね。ほんとうによく頑張った」お祖母ちゃんが墓石の前でかがんでそう言った時、まっすぐに上っていた線香の白い煙がわずかに揺れて、お爺ちゃんも喜んでくれているのだととてもありがちなことを思った。

私だって誇らしかったんだ、実際。

若干、大仰だなとも思ってたけど。

でもとにかくこれからいっぱい勉強して、絶対にいい大学に行くぞと私は思った。同級生の多くがそんな風に思っていた。大学の偏差値表の上の方には、国公立と東京の私立大学が並んでいて、上を向いていると自然と県外に目が向くようになってしまう。

でも、そんなことは私たちにとっては当たり前すぎて、とにかく私は先のこと、県外のことしか考えなかった。

東京、東京、東京。とにかく私は東京を目指して、必死に勉強した。それでちょっとは先生に褒めてもらえる大学に受かって、上京した。

そこから先は、あんまりに言いたくないことも、ねーねー絶対聞いて！ とみんなに言って回りたいこともあったけど、全体としては楽しく大学生活を送って、皆とおんなじタイミングで、明るかった髪を黒に戻して、リクルートスーツを着て、新卒一括採用の輪の中に入っていた。

それは、まるで大縄跳びをしているような気分。

大縄を回すのは少し早く社会に出た先輩社員で、リクルートスーツを着た私たちは、先輩が回す大縄に飛び込んで、ぴょんぴょん跳ねる。縄に引っかかって一人抜け、二人抜けとしている内に、突然縄が止まって、まだ引っかからずに残っていた人がめ得太く採用！

私はうまくそんな大縄跳びを切り抜けた。

でも、それから2年後、どういうわけだか、私はそれまでうまくやっていたはずの、「人生の進め方」がわからなくなった。ある日、突然自分が何をやっていて、どこに向かうとしているのか、まったくわからなくなった。夜にうまく眠れなくなつて、でも、朝から絶対に出なければいけない会議があつて、それで、何とか眠りについて、寝坊してしまつて、そこからはそういう日は寝るのが怖くなつて、そうならよりうまく眠れなくなった。

「大丈夫？」と先輩に聞かれても、「大丈夫」であることを強要されているような気がして、今考えれば全然そんなことなかったと思うのだけど、一度歯車が崩れ始めるともうだめで、東京、東京、東京、と純粹に東京を目指していたもつと若かった頃の自分の影が脳裏にちらつきつつも、私は会社にいけなくなった。私は大縄を回す側に回ることができなかった。

東京に打ち返されるように、私は実家に戻った。少し休めばいい、と親は言ってくれた。お祖母ちゃんがまだ生きていたら、きっと彼女もそう言っただろう。

私は、これからどこに行けばいいんだろう？

多分私はちょっと抜けたところがあって、皆と一緒に道を良く考えずに辿っていただけだと気づいた。新卒一括採用の大縄跳びだってうまく生き残れるくらいに器用だったから、私は躓いたことがほとんどなかったのかもしれない。だからこんな時、どうすればいいのかよくわからない。その器用さが今、あだになって返ってきている。

*

どこで観たのかがわからない光景が頭に浮かぶ。
いつかはわかっている。

まだ私が幼稚園児だったか、小学校の低学年の児童だった頃のことだ。

家族旅行で、どこかの岬に行つて、そして海の方を眺めた。隔てるものが何もなかったから、丸みをわずかに感じる海の果て、ぼんやりと山が見えた。いや、山ではなくて、きつとあれは山脈だっただろう。本当に小さく、まるで蜃気楼にみたいに山脈があった。実家に戻ってしばらくして、そんなイメージが浮かび始めると、四六時中私の頭を席巻した。

「ねえ、お母さん。ずいぶん前のことだけど、そうだ、お祖父ちゃんもまだ生きてた頃、皆でどこかの岬に行つたの覚えてる？」

朝ご飯を食べ終わった私がそんなことを言い出したことに、お母さんは少し戸惑っている。

「岬？」

と首を傾げるお母さんに向けて、重ねて私は言った。

「そう。たぶん、私が幼稚園とかその辺の時期のこと」

「どうだったっけ？」

食べ終わったお皿を片付けながら呟いたお母さんの手が、ふつと止まった。

「そっか、あったねえ、そんなこと」

さっきとは打って変わって明るい声だった。

「夏美は、あそこに行きたいって言って、海の向こうを指さしたんだよ」

それは、本州の南端にある岬だった。

記憶を辿りながら話す母親の声が、私にしみ込むようで、私は20年も前の記憶がまるで昨日のこのように、いや、昨日のことよりも鮮明に、まるで冬眠していた魚が、氷が解けた後の海を泳ぎ回るようによみがえった。

遠くにある山々を、私は「シンドバッドのお話しにでてきた蟹気楼みたい」、「ねえ、ママあそこはどこ？ 日本なの？ 行けるの？」としゃいで聞いたのは、たぶん海自体が初めてだったからだ。

はしゃいでいた自分のことはよく覚えているけれど、お母さんが何て答えたのかは覚えていない。

以来、私の頭の中にはずっとその海の向こうの山稜が消えなかった。

東京、東京、東京、ずっとそう考えていた高校時代にだって、もしかしたら頭のずつと奥にはあったのかもしれない。実家の周りを散歩している時も、たまにはと気を遣って朝食を作っている時にも、気が付けばその山稜を私は思い浮かべていた。

ある朝、朝食を食べ終わった後に、私は思い切ってお母さんに「ちよっと旅行に行こうと思うんだ」と切り出した。

「旅行？」

「うん」

「そう。それもいいかもね。どこに行くの？」

「北海道」

「一人で？」

「うん、一人で行こうと思ってる。それで、旅しながらいろいろ考えて、もしかしたら東京に戻るかも。それか、ここで仕事でも探そうかな」

お母さんは、いつもの戸惑った顔を見せた。長年親子をやっているからわかる。彼女は私を心配しているのだ。彼女の目の揺らぎはしかし、ゆつくりとおさまっていく。

「そうね、それもいいかもね。あれだったら、お母さんが空港までおくってあげる」

東京の人に言ったらたまに驚かれるけれど、青森から北海道に行く際にもたいていの人は飛行機を使う。新幹線はまだ札幌までつながっていないし、「北海道はでっかいどう」とはよく言ったもので、札幌は西寄りにあるとはいえ、青森駅から最低でも2回は乗り換えが必要で、合計5時間はかかる。だったら、車で青森空港までいって、そこからびゅーんと飛行機で飛んだ方がずっと早いし楽だ。

北海道には何度か行ったことがあったけど、本当に数えるほどだ。たぶん家族で2回だけ。2回とも車でそのまま札幌に向かった。空港から降りる人の流れに沿って、ほとんど自動的に私たちは札幌まで運ばれて行ったような印象だ。

でも、今回はそんな半自動的な流れに乗ってはいけなかった。私は空港を降りて、事前に予約していたレンタカーショップに寄った。一人でレンタカーを借りるのは初めてのことと、そのことをお母さんにも言っていないかった。きっと彼女は今頃私が前と同じように札幌まで運ばれて行っていると思っているだろう。そんな彼女が想像する私は私と分離して、レンタカーで車を借りて（NISSANのNOTEだった）、エンジンをかけた。千歳の街は、10分も走らない内に、市街地が途切れた。

目指すは、海岸。

そこに何があるかどうかは知らない。調べるのは簡単だし、GoogleもAIも勝手に私が知リたがっていることを、本当は知りたくないことも、勝手に教えてくれるけど、私はそんなものを求めていなかった。私が求めているのは、いつからか私の頭に住み着いた向こう側だ。あの、海の向こうに見えた対岸。こんな風に旅したことも、こんな風にどこかを目指したこともなかったけれど、今私はちゃんと目的地を目指している。

大きな建築途中の工場を越え、冗談みたいに大きな球体が並んだ場所を越え、私はとにかく車を走らせる。カーナビの表示が海を映している。私はそこに向かって一本道を進む。

灯台みたいなものが見えてきて、ちらほらと人が見えた。お祭りでもあるような人出で、でもお祭りではないことは確かだ。なぜなら、皆がウエットスーツというんだっただか、ドライスーツというんだっただか、知識の持ち合わせがなくてあいまいだけれど、海に潜る時に着る用の全身を包む水着を着ているからだ。そんな人が集まるお祭りなんかあるわけがない。

さらに車を進めると、いよいよ海が見えてきた。砂浜のビーチの光景に私は驚く。私を驚かせたのは、そこに横に並ぶ自動車たちだった。

ずっと真横に続く砂浜。

そしてそこに並ぶたくさんのお自動車たち。それらは少し間を空けて等間隔に並んでいる。背の高い車が多かった。何十台、ひよっとしたら百台を超える車が並んでいる。街中を走っている車に比べると、カラフルなものが多い。もちろん、白と黒も多いのだけど、黄色や空色の、背の高い車たち。

みんな車に乗って来て、砂浜に乗り上げ、何をしているのかといえば、一目瞭然だった。サーフィンをやっているのだ。横に長く伸びる砂浜があり、その先の海の波の上を、何十人ものサーファーが波に乗っている、あるいは乗ろうとして失敗し、波の中に崩れ沈む。

北海道でサーフィン？

春も終わりに近づくころだけど、少しまだ肌寒い。

私の頭にはいつかのあの光景、海の先の山稜が浮かんでいる。その光景と今日の前にある光景とが重なって、考える前に体が動いていた。

私は車を降りて、砂浜に入った。鍵を車の中に忘れていたことに途中気づいていたけれど、引き返すこともなく、砂浜の先を歩いた。流木を踏んでしまい乾いたそれが碎け、休んでいるサーファアの脇をすり抜けて、波打ち際ぎりぎりまで進んだ。

そして、海の先を見た。

あるのはただの水平線。

そこにいたるまでの水域に浮かぶ船。

けれど私にはなぜかわかる。

いつか、わたしはちょうどこの海の先の岬から、こちら側を見ていた。

いつか見たこちら側に、今、私がいることを。

SIDE B

たしか僕が小学校五年生の時のことだった。

通常のカリキュラムだと小学校六年生から始まる歴史の授業を塾で受けた。先取り学習というやつで、クラスの中で塾に通っていない友達より少し早く学ぶことをなぜだか得意げに感じたものだ。

自分の特性を知るのは、人それぞれのタイミングがあると思うのだけど、僕はきつと早い方だ。小学校低学年から入ったサッカーチームでもそう下手な方ではなかったし、4年生になったら、ちらほら試合にも出してもらった。負けが決まった試合ばかりでもなかったと思う。普通なら、得意になってもおかしくなかったはずだ。いつかプロになるだとか、その前段階で地域の選抜チームに入るだとか、プロチームのユースに入るだとか、そんなことを言っていたって誰も笑わなかっただろう。それくらいには上手かった。

けど、僕にはその当時から、なんだか醒めている部分があって、冷静な気持ちで、自分はそのまでの選手にはなれないだろうと感じていた。どれだけ熱中したところで、トップレベルにはなれないような気がした。今思い返してみたら、才能云々の前に気持ちこそつちに向いていなかったのだと思う。本当に国内のトップレベルの道を進もうと思ったら、どれだけ才能に恵まれていたとしても、必ず立ちはだかるだろう壁を、それも何度も現れるだろうそれを超えられるかどうかは、かなりの部分気持ちの強さだと思う。

でも、「歴史」は、僕の心を一瞬でとらえた。

かつてなにかあったのか、誰がどんなふうに生きて、なにをなして、それが今にどんなふうに繋がっているのか、そのことを知って想像することで、僕は日がな一日飽きずに暮らすことができたのだ。それまで夢中になっていたアニメだってゲームだって、もう興味がなくなっていた。図書館に通っては、偉人伝を最初は漫画で、それを読みつくすと、文章で書かれたものをどんどん読んでいった。

学校のカリキュラムも塾のカリキュラムも完全に無視してどんどん読んでいった。幕末に特にはまった。小学生の理解力でどれだけ正確に理解できていたのかはわから

ないけれど、ながらく武士が握っていた政治の実権を天皇へと戻される、大政奉還へといたるまでのあれこれを調べるうちに僕は人間の社会の機微を知った……、つもりになった。

「歴史」にはいろんなものが含まれている。社会というものがどういう理屈で動いて、どういう力関係が発生して、何を守ろうとしていて、何を隠そうとしているのか。小学五年生だった自分がどこまで言語化できているのかわからないけれど、何か勘所を掴んだつもりでいたことは確かだ。

僕が歴史の研究を始めるのは必然だったと思いたい。学部時代に、塾講師やら営業のバイトやら、高給なバイトで学費を貯めて、そのお金で大学院に入るまで本当に飽きなかったのだから。でもそれも東京に自宅があったからできたことだということはわかってる。もし自分で家賃を始めとした生活費を稼がなければならなかったら、とてもあの程度の働き方では足りなかっただろう。

研究者になるつもりか？ と友人や家族に訊ねられ、そのつもりだと僕は答えていたけれど、実際、そこまで明確な将来像を抱いてはいなかった。僕はただ、知りたかったのだ。歴史を。そしてそれが浮き彫りにする、本当のことを。

本当は、日本人は一つの民族だけではない。

でも考えてみれば、もともと日本で人類が発生したのではないのだから当たり前のことだ。定説によれば、現生人類の直接の祖先にあたるクロマニヨン人は、約10万年前に生まれ育ったアフリカを出て、世界の隅々へと歩き出した。グレートジャーニーと呼ばれるその壮大な旅の行き止まりは一つではなかった。

一番近い行き止まりはヨーロッパ。

地中海を越えて、ヨーロッパ大陸へと広がったクロマニヨン人たちは、最近の学説によれば、ネアンデルタール人との混血を進めながら、ヨーロッパ大陸の西端にまで広がる。西端と言えば、フランスやデンマーク、スペインあたりの海岸を有する国だ。一部、後にドーバー海峡を渡りイギリス列島へと渡りもしただろう。けれどその先の大西洋を渡ることとはできない。海岸から遙か先に水平線が横たわる光景は、その先に向かう意欲を挫くのに十分だったに違いない。

一方、大陸の東端にはなかなか至らない。今でいう中東をこえて、中東の出口であるホルムズ海峡を陸路で越えて、さらに東へ。インドを越え中国を越えて、ようやく東端に着く。

その先にあつた日本は、当時は大陸と地続きだったらしいから歩いてきたそうなの。

まさに日本は端っこにあった。日本に渡った人類は、列島の東西南北のそれぞれの端に行き渡った。その後海が大陸と日本を隔てたものの、大陸から逃げてきたか、旅立ってきたのかは主観によるのかもしれないけれど、折々に人類は列島へと渡り、やがて京都を中心に国家が成立し、今に直結する日本の「歴史」を刻み始めるけれど、その威容は列島の隅々にまで即座に至ったわけでない。

*

「鹿だよ、鹿取君、ほら、鹿、鹿」

教授との最後の探索を僕は忘れられない。

大学の仕事をちゃんとしないと事務方によく怒られていた教授の研究室は、教授の定年退職にもなって閉室が決まっていた。本人は気にしていなかったようだけど、周りは気にした。閉室が噂されてからは、入室を希望する院生がいなくなった。残っているのは、僕と、既に修士で研究を終えて就職を決めている二人の三人だけだった。

最後の探索で僕たちは鹿を何度も見た。その度に教授は、「鹿だよ、鹿取君、ほら、鹿、鹿」と言うのだった。

「ええ。鹿ですね」

「いいですか？ 鹿取君。鹿はアイヌの人たちにとってもとっても重要なんですよ」

最後の探索はアイヌの研究のフィールドワークだった。僕たちは、雪の解け切った6月を選んで、空港から車で十勝平野まで北上し、それから南下して、これまで教授が調べてきたアイヌの史跡が今どうなっているのかを確認していったのだった。それはまさに教授の人生そのものを回顧するようなものだった。

一つ一つの史跡をめぐっては、デジタルカメラのシャッターを切りながら「私が研究を始めた当初はね、鹿取君、デジタルカメラなんていう便利なものはなかったなあ、だから、ちゃんと取れているか不安な気持ちでシャッターを下ろしたもんさ。それは今どきはデジタルカメラですらなく、全部スマホだもんな」文句なのか、ただの感慨なのかわからないことを呟きながら教授は作業を続ける。

最終日、朝から厚幌ダムの付近まで車で行って、写真をまたパシャパシャ撮った。その時間を経ずに、僕たちはまた車に乗った。全体が緑に覆われた土地を、うつすらとした土色が蛇行して走るのが僕らの通るべき道だ。僕たちは極力厚真川沿いを走った。

「厚真川、鹿取君、覚えてますか？」

教授に質問され、僕は頷く。

「はい。四百年前からアイヌの交易で使われていた重要な水運の要ですね。本州の大和との交易の窓口で、この川を渡って内陸へと運んだ」

「さすが鹿取君です。ですが、四百年前というのは違いますね。鎌倉時代から既に交易はありました。その頃の脇差、というのは、太刀とは違って接近戦用の短刀のことですがね、それもこのあたりの土地から出土しています」

僕は時々、初歩的なことがぽっかりぬけてしまうことがある。鎌倉時代と言えば四百年どころか千年も前だ。教授によればそれよりもずっと前から、既に交易があったらしい。その窓口がこの辺りだったのは、本州から潮に乗れば容易にたどり着くこ

とができたからだそうだ。

車を走らせていると、またダムが見えてきた。車を停めて、教授はまた写真を撮り始める。さっきよりも入念に。

「この厚幌ダムの底にはですね、鹿取君、千年前に祭祀がおこなわれていた場所やら、墓地やら、道内でも最も古い史跡があったのですよ。私が君と同じくらいの年だったかな、いやもう少し年上だったかな、まだ学部生の頃だったかもしれないがね、当時の教授と一緒に竣工式に参加したんです。その教授は、十年以上にわたっての発掘事業に尽力されて、可能な限り史跡を地上に引き上げて保存なさったんだが、ダムに沈む現地を見ながらひとつひとつのことを事細かにお話されたんですね。あの出土品の割れ具合、触った感触、途中まで腐ったけれど泥に守られて残った木片……」

僕は教授にとっての教授の話を聞きながら、その時の語りをまさに目の当たりにしているような気分だった。

厚幌ダムが竣工されたのが1970年。それに先立って行われたという発掘調査はだから、教授にとっての教授が事前調査をしたのは1950年代ということになるだろう。第二次世界大戦が終結したのが1945年のことだから、終戦後まもなく調査が始まったことになる。

その調査で、厚真町のアイヌの史跡は、最古級の場所であることがだんだんとわかってきた。

「最初に人は鹿を追ってここまで来たんですよ、鹿取君。アイヌと言えばですね、熊を神として崇めているイメージがあるかもしれませんが、厚真を掘っていると、鹿を祀った形跡もある。それとともに鹿塚なんかも出土してる」

「鹿塚ですか？」

「貝塚は聞いたことがありますね？ 貝を食べ終わった後の貝殻を一か所に捨てた跡。その鹿版と考えるとわかれればわかりやすいかな。鹿取君、君みたいな輩が、鹿を取っているうちにですね、内陸からだんだんと海に近づいてきて、やがて海岸にいたったわけですよ」

鹿取はただの名前ですよ、と僕は言わなかった。教授はふざけているようで、本心はそうではないとわかったからだ。彼にとっては最後の探索で、なんということのない一日だけど、町内で一軒だけある銭湯に併設されたこの宿での一夜が明ければ、それも終わるのだ。

僕たちは露天風呂の寝椅子で並んで寝ころび、星を見ながら話していた。オリオン座の三ツ星がまぶしいくらいに輝いていた。

「研究が続けられれば、まだまだ事実は明らかになると思うんですがね。縄文文化から本州との交易を経て擦文へと移行していった遷移も、それから、北からきた文化と混ざり合ってアイヌへと移り変わっていった部分も。特に縄文から固有の文化をはじめ

た移り目はまだまだ研究しがいのあることです。だが、閉室になってしまったから、後を頼むとも言えませんか」

それきり教授は黙った。

もう話が終わったのかなと思いつつ、再び彼はおもむろに口を開いた。

「でも、はっきり言えることはですね、鹿取君。例え誰も知ることがなかったとしても、あったものはなくならないということです。目の前から消えてしまったとしても、そのことを皆が忘れてしまったとしても、誰も覚えていなくとも、あったことはなくならないし、なかったことにもならない。そうでなければ、実際のところ、誰も人生の孤独に耐えることなんてできません。いつまでも海がなくならないように、波もなくならないように」

SIDE A

人生を変えるには、三つのことのどれかを変えればいいんだとどこかで読んだ覚えがある。どこで、それを読んだのかは思い出せない。

確か、一つは仕事を変えること、一つは住む場所を変えること。それと、あともう一つは何だったっけ？

それが本当のことなのかどうかわからないけれど、ぎこちなく指輪を私の指にはめようとする彼の手つきを見ている内に、私はそんなことを思い出していた。人生の節目、晴れ舞台だと憧れる子も多いだろう結婚式のまさにこの瞬間に、こんなことを考えていることが自分でもなんだか可笑しく感じられて、つい笑ってしまう。

その笑みを、どういう風に受け取ったのか、なかなかうまく指輪を嵌められない手をとめて、こちらを向いた。

ベール越しに見える彼の目を私は見つめ返し、焦らなくても大丈夫だよ、と言う思いを込めて、ほほ笑んだ。付き合いが浅い内なら、そんな私の想いが伝わったかどうか心配になったかもしれない。でも、私は彼の表情から、彼に私の気持ちが伝わったとわかるし、彼もそのことがわかっていて、そのこともまた私にはわかる。もしかしたらそんな風に感じるのは、絶頂期の誤解かもしれないけれど、いずれにしろ、私たちはこれから長い時間をかけて、誤解かもしれないそれを二人で、もしかしたらいつか三人となり、四人となるかもしれない、私たちが追い求めることになるんだ。

それこそ、病める時も、健やかなるときも。

私と鹿取修二君が出会ったのは、海辺だった。

まだ誰もいない早朝の海辺。

最初の日は、真横にずっと伸びる砂浜に車が並んでいる光景、それから、夕日を背にサーフィンに興じる人々の様子に私は驚きを感じた。

北海道にそんな場所があるとは思っていなかったから。

北海道にサーフスポット？

子供の頃に見ていた向こう側の正体が意外過ぎることに私が思わず笑ったのだ。

夜になり、人がすっかりいなくなった後、私は海を眺めながら予約した宿泊施設に移動し、眠った。思ったより、疲れていたようで、すぐにぐっすり眠った。

その日、夢を見たのだった。

それは今まで考えたこともないことをやる自分の姿だった。夢の中で私はサーフィンをしていた。海には私以外誰もいなかった。寄せては返す波に私は何度も何度も挑戦する。パドリングという動作であることが、今の私にはわかるけど、その夢を見ていた時には名前もわからない動作で、サーフボードを体に密着させて海に浮かび、両手を着水させて波に向かって漕ぐ。

大きな波がやってくることを察知すると、押し寄せる波に背中を向けて、波から逃げるように必死に漕ぐ。そして、えいやとサーフボードの上に立ち、竜の背中みたいな波の上に乗る。夢の中だから私はいとも簡単に波を乗りこなすことができる。

サーフボードを揺らす波の振動を足の裏に感じ、水しぶきを頬にうけ、すっかり波が消えてなくなるまで私は波に乗り続ける。

翌日、私は町内のレンタルサーフィンショップを訪れ、一式を借りた。そして、YouTubeで、ウェットスーツの着方や、初心者サーフィンの仕方を学んで、サーフボードを脇に掲げ意気揚々と海辺へと向かった。

もちろん夢のようにはいかなかった。波に乗るところか、サーフボードの上に立つことすらできなかった。

あの時の自分が何を考えていたのかは、正直よく思い出せない。思いおこそうとして浮かぶのは、赤い熱の塊のようなものが、私の頭の中にあつただけだ。東京を目指していた時とも違うし、世の中の的な普通はこうだねという波にうまく乗れることを小さな誇りとして生きてきた、半年前とも違う自分が確かにそこにいた。

私は結局、その年の初夏から秋が深まるまでの間、早朝はずっと海の中にいた。リーズナブルな部屋を探し、仕事を見つけ、そしてこの海辺の町に移り住んだ。牧場の仕事が始まる前の時間が一番の自由時間だった。私は毎朝、まだ日も昇らない内に、波に挑み、そして波に沈んだ。

ようやくなんとか波に乗れたと言えるレベルになったのは、夏も終わりが近づいていた頃だ。

そしてある夏の終わりの早朝。

他に誰もいない海辺で、私は修二に出会ったのだった。

サーフボードを掲げて、海から上がって来た私を、何か珍しいものでも見るような、あつけにとられたような目で見ていた。

まだ指輪をはめられていない私はまた修二に笑いかける。

大丈夫、焦らなくていいから。

どれだけ大変なことだって、辛抱強く待って、挑み続ければ、いつか問題なく乗りこなせる時が来るから。

SIDE B

披露宴、という響きにばかばかしさを感じるのだけれど、定石を外せない性分である僕は、フォーマット通り、披露宴を滞りなく終えて、二次会で一息ついた。タキシードはもちろんのこと、普段からスーツも着ない僕は、首元をゆるめ、友人の坂本にすすめられるがままシャンパンを飲んだ。

二次会では、坂本がつくったVTRが流れた。同僚の役場の人たちが普段の僕の働きのぶりをインタビューされて話してくれている。大学の友人たちへも坂本はインタビューしてくれていて、卒業後は会ったこともない大多数の友人たちの祝福メッセージを聞いている内に、自分の大学時代が友人たちに囲まれた明るいものだったような錯覚に陥るが、友人たちに囲まれていたのは坂本であって、僕は彼がいなければ、ひどく孤独だったはずだ。

「そう言えば、結婚の決め手はなんだったの？」

坂本が訊ねてくる。

「VTRでは、お前はぐらかしたからさ」

坂本は僕にもインタビューをした。その時にそんな質問をされたことはもちろん僕も覚えている。

初めて会った時にもう決めていた、と言ったらロマンチックに響くだろうか。

実際にそうなのだけど、そう言ってしまうと、事実とはちよつと違う気がして、やはり僕は今回もはぐらかした。

夏美に初めて会った日、それは教授の最後の探索の翌日だった。

教授は一足先に帰り、僕だけがもう一日町に滞在することにした。あの探索が終わったら、僕も大学を去るつもりだった。興味に弾かれるまま、教授についてきたのだけど、もうなんの未練もなかった。

教授は一度も結婚したことがないそうだった。自分の研究に没頭し、結婚のことを真面目に考えることもなかったそうだ。

「いや、一度だけ考えたことがあったね、鹿取君、そう言えばだよ、そう言えば」

そして、話し出した教授の話は、僕にはとても奇妙に聞こえた。彼が結婚を考えた相手は人ではなかった。

まだ教授が若かった頃のことだ。教授は教授ではなく、まだ一介の研究者だった。

この町を中心にフィールドワークをしていた頃、研究に行き詰っていた彼は、探索中にある鹿に出会った。

停車した車に鹿は近づいて来て、一度フロントガラス越しにこちらを覗き込むように見ると、ついて来いとジェスチャーで示すみたいに、顎を振って前を向いた。教授は車を降りて、鹿についていった。車ではもう進むことができない道になっていたからだ。鹿が本気を出して駆けていけば教授の足ではとても追いつけなかっただろう。鹿は、教授の進みに合わせるように、少し先に行っては教授を待ち、追いつきそうになったらまた先に行って待つのを繰り返した。

どこかに連れていこうとしているらしい、とまだ教授ではなかった教授は思った。崖に差し掛かり、鹿はそれを軽々と飛び越えて行き、向こう側でまたこちらを見た。誘っていることは間違いないさそうだが、教授の本能はその崖を飛び越えることを拒んでいた。

「私はもしかしたら、あの鹿に導かれるまま、あっち側にいくべきだったのかもしれない、とそう思う時があるんです。あっち側には、もしかしたらもっと素晴らしい、私にとってもマッチする何かがあったのかもしれない、と思うんです。こういう言い方をするとぼけた老人みたいだけでも、あえて言えばね、鹿取君、本当の人生みたいなものが」

そこまで言って教授は、惚けたような顔になって、何の話だったかな？ と僕に聞いていた。

「結婚の話です」と僕は答えた。結婚の話がいつの間にか鹿の話に変わっていたが、不思議とちぐはぐな感じはしなかった。

「そうか、そうか、そうでした。その鹿とですね、鹿取君、私はもう一度会ったことがあったんです」

「もう一度ですか？ どこですか？」

というよりその鹿は本当に同じ鹿だったのだろうか？

「この町の海辺です。この町に泊った時は、早朝海辺によくいていたんです。冬でしたし、まだ早朝でもありましたから、誰もいませんでした。そこに彼女がいたんです。私を崖の向こう側へと誘ったあの鹿が」

*

その日、僕もこの町に来るのはこれが最後だと思っていた。

車を降り、砂浜に降りて、波打ち際に近づいてった。

そこには、一つの影があった。

教授の声が頭に響いていた。

……私はもしかしたら、あの鹿に導かれるまま、あっち側にいくべきだったのかもしれない、とそう思う時があるんです。

……その鹿は、私をじっと見た後、ぷいとそっぽを向いて、遠くに行ってしまいました。
今度はこちらを全く顧みることもありませんでした。

影はこちらを見ていた。

いづれぷいとそっぽを向いて、どこかに行ってしまうかと思ったけれど、そうはならず、影は僕をじっと見ていた。

それにその影は鹿ではなくて、人、しかも女性だった。

期せずして見つめ合うようになってしまった僕は、

「サーフィンですか？」

と見たままの質問をした。

彼女はサーフボードを持っていた。

「ええ、そうです。この夏から始めたんですが、全然乗れなくて」

と彼女は心底悔しそうに言った。

「でも、波も海もなくなりませんかね。もう少しやってみます」

上田 岳弘（うえだ たかひろ）

1979 年兵庫県生。作家。2013 年「太陽」で第 45 回新潮新人賞を受賞しデビュー。2015 年「私の恋人」で第 28 回三島由紀夫賞、2019 年「ニムロッド」で第 160 回芥川賞等受賞多数。

現代社会におけるテクノロジーの進展やグローバル化、資本主義の変容といったテーマを背景に、人間の存在や意識のあり方を鋭く問い直す作品を発表。現実と想像力を往還しながら、新たな時代の人間像を描く作風に定評がある。

主な著書に「太陽」「私の恋人」「異郷の友人」のほか、「ニムロッド」「キュー」など。近年は AI や情報社会と人間の関係性にも関心を広げ、現代的かつ先端的なテーマを扱う作家として高い評価を受けている。

移：移り住むということ

著者 上田 岳弘

発行 厚真町 with SFP Design

装丁 本田正浩（株式会社ウィズグループ）

